温泉の評価を考える

4

温泉評論家・日本温泉地域学会会長　石川　理夫

このたび刊行された『美しき日本　旅の風光』では、日本を代表する観光資源の種別に「温泉」が新しく加わった。その結果、特A級とA級に選定された三十三カ所（注1）の温泉地が紹介されている。

一九九九年（平成十一年）刊の『美しき日本』では温泉を取り上げなかったことを鑑みれば、近年の国内外観光客の温泉志向を背景に、観光資源としての温泉（地）を再評価したと言えよう。そこで温泉評価の歴史を踏まえ、「日本が誇るべき素晴らしい温泉」とはどのような資質、要件を備えたものか、温泉の選定評価について述べてみたい。

温泉(地)は自然資源と人文資源を併せ持つ

本稿では時に「温泉（地）」と言い表す。温泉資源を表す「温泉」とそれを基に成り立つ「温泉地」を包括した表現である。これは自然資源と人文資源に大別された観光資源の中で、温泉（地）は両方にまたがることを意味する。観光資源として優れて複合的な特性を持つのが温泉（地）なのである。

温泉（地）の自然資源、人文資源の理解には、以前に日本温泉地域学会が第一次選定百二十五件を本にまとめた「日本温泉地域資産」という概念が役立つと思われる。これは日本温泉地域自然資産と同文化資産、同複合資産の三つで構成される。

温泉地域自然資産とは温泉資源そのもので、今も豊かに自然湧出（ゆうしゅつ）する泉源（湯元）、多様な個性と成分や泉質を有する源泉、源泉が生み出す固有の自然現象の果実（間欠泉、噴湯丘、噴泉塔、石灰華、温泉に生息する特殊な生物等）が含まれる。

温泉地域文化資産には日本の湯治・温泉文化を特色づける入浴・温泉利用法や浴槽・浴舎、温泉神社や温泉寺・薬師堂を含む温泉信仰、伝統芸能・行事、情緒を醸し出す温泉街や泉源広場、伝統的建造物などが含まれる。ちなみに複合資産は選定対象が両方にまたがる例である。

日本温泉地域資産は日本の貴重な温泉資源と温泉文化、温泉地の歴史的文化的蓄積を評価、観光資産活用を含めて活性化に寄与する目的で選定した。自然資源と人文資源を併せ持つ観光資源として温泉（地）を評価する際にも参考になると考える。

世界遺産の例では、トルコの複合遺産「ヒエラポリス-パムッカレ」のパムッカレは湧出源泉の生成物である石灰華段丘で、ヒエラポリスは隣接して築かれた古代温泉都市遺跡である（写真1）。

写真1　トルコのヒエラポリス-パムッカレ：野天風呂の湯底に古代ローマ遺跡（筆者撮影）

前者は温泉地域自然資産または自然資源に、後者は温泉地域文化資産または人文資源に該当する。

写真2 イギリスのバース：源泉をたたえた古代ローマ浴場遺跡（筆者撮影）

イギリスの「バース市街」は、泉源と古代ローマ浴場遺跡（**写真2**）を含む街並みが登録されている。歴史的文化的蓄積を持つ温泉地が世界文化資産となる素晴らしい事例である。

温泉（地）は歴史的にどのように評価されてきたか

それでは温泉（地）を日本ではどのようなものとみなし、評価を与えてきたのだろうか。

文献上最も古い例は、奈良時代の『出雲国風土記』の島根県玉造温泉と湯村温泉に関する記述に見られる。湯浴みすれば「形容端正」、「万病除ゆ」。そのため、前者を「神の湯」と評価。同じく効能ゆえに後者は「薬湯」と評価された。老若男女が大勢集い、どちらも観光地さながらにぎわっていた。しかし何より温泉（地）は、入浴等の利用がもたらす恩恵、療養効果により、「神の湯」と称えられるほど評価を得たのである。

平安時代、熊野に詣でた右大臣・藤原宗忠は、湯垢離場（注2）であった和歌山県湯の峰温泉に入浴した感激を「これは神の験にほかならない。此の湯に浴すれば万病を消除するといわれる」と日記『中右記』に記した。湯の峰温泉も世界文化遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に含まれている。

図1 1817年（文化14年）刊の温泉番付表「諸国温泉功能鑑」

医学に救いを求められなかった時代、湯治療養地として温泉地の存在価値は高く、評価は効能本位で一貫していた。相撲番付に倣って江戸後期に流行する温泉番付「諸国温泉功能鑑」（**図1**）もその一つである。

これは全国の温泉地約九十カ所を東西に分けて三役から前頭まで格付けし、温泉名の上に「万病・諸病」「瘡毒」（梅毒）等と記す。効能で知られる名湯を選定評価しており、東の草津温泉、西の有馬温泉は明治時代まで不動の最高位・大関を保った。

一方、伝統的な効能的評価法と並行して、新たに江戸後期には観光資源的評価が台頭する。

一例は、『北越雪譜』で知られる越後の文人・鈴木牧之が平家落人伝承の秘境・秋山郷を十返舎一九の勧めで探訪し、一八二九年（文政十二年）に出した『秋山記行』である。同書は秘湯紀行でもあり、「命の洗濯する心持ち」と、野天風呂や湯を愛でる観点から温泉を評価している。

江戸の大衆消費文化が成熟して、東海道中膝栗毛など滑稽本の旅物や温泉紀行文が増え、旅の許可を得る「湯治」は名目上で、実際は物見遊山の温泉旅行が広まった。一八一〇年（文化七年）に八隅蘆菴が出した『旅行用心集』は日本初の温泉旅行ガイドで、「諸国温泉二百九十二カ所」を収録。冒頭に「唯養生の為に湯治する人は勿論、物参り、遊山ながらに旅立」人にも見易くした、と刊行目的を記す。こうしたトレンドが新しい温泉評価登場の背景にあった。

温泉資源の卓越さが選定評価の基にある

温泉評価の歴史に登場した温泉地のうち湯の峰、草津、有馬の各温泉はこのたびも選定された。これらの温泉地は、評価法が異なる千年、数百年後もなお選定評価される資質、要件を備えていることになる。

温泉（地）は自然資源と人文資源を兼ね備えた複合的な特性を持つが、地球の恵みたる温泉湧出を基に成り立つのが温泉地である。したがって温泉選定評価の大前提、第一の

要件は、自然（温泉）資源の豊かさ、卓越性、その優れた特色にあると考える。

今回、草津温泉と別府温泉郷の二カ所が特A級に選定された。共通するのは、世界を見渡しても傑出した温泉資源を有し、その特色を活かした営みを重ね、人文資源・文化資産たる温泉地の今日の姿、景観や街並みを築いていることである。

草津温泉を特A級と評価するのは、高温自然湧出泉の泉源広場「湯畑」を中心に伝統的な和風旅館街や共同浴場群を持つ街並みを放射状に形成してきたこと（**図2**）、豊富に湧出する強酸性泉を利用した時間湯という伝統的入浴法・湯治文化を保つことである。なお、酸性泉は火山性温泉に恵まれた日本の代表的泉質で、海外では数少ない。

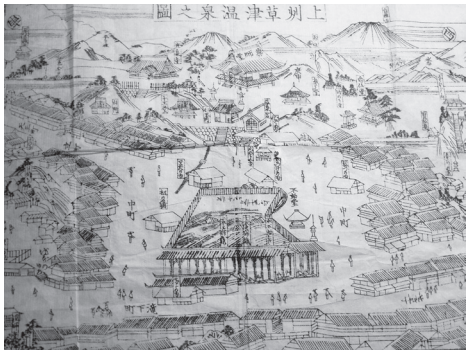

図2 江戸時代の「上州草津温泉之図」（草津町温泉資料館）。湯畑を核に温泉街を形成している様子がうかがえる

別府八湯より成る別府温泉郷は、温泉の生みの母たる伽藍岳・鶴見岳と別府湾の間の傾斜地に広がる自然景観が素晴らしい。そこに二〇〇一年（平成十三年）の「21世紀に残したい日本の風景」（NHK公募）で二位に選ばれた湯煙景観が現出し、別府のシンボルとなっている。

『豊後国風土記』にも記されたもう一つのシンボルが鉄輪地獄（**写真3**）で、噴気や熱泉ほとばしる地獄と呼ばれる泉源地帯が多く見られるのも日本の温泉地の特色である（注3）。

写真3 別府・鉄輪地獄の海地獄（筆者撮影）

選定三十三カ所のうち、別府のほか、登別、酸ヶ湯、乳頭温泉郷、玉川、後生掛、鳴子、那須湯本、草津、万座、箱根大涌谷、雲仙、霧島温泉郷の計十三カ所が噴気・地獄地帯を持つ。これも卓越した自然（温泉）資源が選定評価の基になっている証左だろう。

また、塩化物泉、硫黄泉、硫酸塩泉、酸性泉など九種類に大分類される泉質のうち、別府温泉郷は放射能泉を除く八種類がそろうのも、霧島温泉郷と並び、温泉資源の多様性、豊かさを表している。

温泉選定評価の対象となる要素

次に、温泉選定評価の対象となる資質、構成要素から考えてみたい。

草津は「草津温泉の湯畑自然湧出泉源広場と温泉街、共同湯と時間湯」が構成要素である。別府は「別府温泉郷（八湯）の湯煙景観と鉄輪地獄、伝統的共同浴場群と入浴法（泥湯、砂湯）」が構成要素である。草津の温泉街、共同湯、時間湯、別府の伝統的共同浴場群と入浴法（泥湯、砂湯）は人文資源の構成要素であり、湯煙景観は自然・人文の複合的な構成要素と言える。

選定三十三カ所中、純粋に自然資源のみで構成されるのは「噴煙・泉源地帯」の箱根大涌谷一件である。兵庫県湯村温泉も、自然資源の高温自然湧出泉源「荒湯」を構成要素とするが、『夢千代日記』の撮影舞台ともなり、荒湯を中心に広がる情緒漂う温泉街も観光資源として大きな資質、構成要素たり得ている。

一方、人文資源の構成要素のみで評価される温泉地は、木造三層・四層「旅館街」の山形県銀山温泉、日本初の計画的「石段街」の群馬県伊香保温泉、「総湯広場」を核に温泉街を形成した石川県山中、山代温泉、伝統的共同浴場建築「道後温泉本館」の愛媛県道後温泉を始め数多い。この場合も、例えば青森県酸ヶ湯温泉の「伝統的なヒバ造り千人風呂」が、風呂底から湧き上る酸性硫黄泉入浴のため造られたように、自然資源が

基にあることは言うまでもない。

こうした構成要素は、

- 自然資源としての**温泉の湧出現象**（以下草津と別府を例にとれば、自然湧出泉源、鉄輪地獄）
- **源泉そのもの**（強酸性泉、八種類そろう泉質）
- 周囲の**自然環境**
- 人文資源としての**伝統的な浴槽・浴場建築**（共同湯、共同浴場群）
- **入浴・温泉文化**（時間湯、泥湯・砂湯）
- **街並み**（広場、温泉街）

など六項目にまとめられる。

六項目全てに優れた資質の構成要素を備えた温泉地は、特A級二温泉地のように評価がきわめて高い。一軒宿、秘湯型のA級温泉地の場合、街並みといった構成要素はなくても、他の項目の多くに該当する資質、構成要素を備えている例が多い。

また、項目的には一、二該当するのみでも、海外に類を見ない特色、魅力、日本の温泉文化を体現していれば、高い選定評価を得るだろう。

日本の町で歴史的に唯一広場を形成し得たのは温泉町であることを考えれば、草津の泉源広場・湯畑同様、山中、山代温泉の「総湯広場」は意義深い。しかも総湯は中世の惣村（そうそん）以来温泉地域共同体が育んだ「惣湯」のことで、温泉地が共同で資源や浴場を管理する伝統を体現している。

A級温泉地では、野沢、渋温泉の核となる共同湯「大湯」も以前は惣湯と呼ばれていた。こうした地域共同体による資源管理（コモンズのガバナンス）は今日、世界的に見直されている（注4）。

また、A級選定の鳴子、那須湯本、野沢、渋、有馬、城崎温泉など歴史ある温泉地は、泉源と中核となる共同浴場を温泉神社や温泉寺・薬師堂が守護する形で形成され、温泉の恩恵にすがった人々の慈しみや畏敬（いけい）の念を今に伝えている。湯だけでなく、長く効能評価を支えた人々の思いが、訪れる観光客にも深い安らぎを与えてくれるはずである。

世界に評価される〝美しき日本〟の温泉

環太平洋火山帯に位置する日本は、源泉総数や総湧出量、温泉地数からみて世界一の温泉大国である。これは温泉が日本の観光資源上きわめて大きなファクターとなり得ることを示唆している。

温泉が日本人にとって主要な観光目的であることは言うまでもない。それに近年増大する東南アジアからを含む外国人観光客は、主な訪日目的に「温泉」を挙げている。実際、箱根を訪れる外国人観光客は必ず観光スポットの大涌谷に立ち寄り、噴気上る景観に日本の温泉資源の豊かさを実感している。

もっとも、日本は温泉資源の豊かさにあぐらをかいてはならないだろう。韓国や台湾に続き中国もまた近年、日本を参考にした大深度掘削による温泉リゾート開発に拍車をかけている。温泉地の数が三千カ所を超える（注5）という中国は潜在的な温泉大国であり、やがては国際的に温泉地の施設や設備面でのレベルが平準化・均一化して日本の優位性を失いかねないのである。

そのためには温泉選定評価に示されたように、日本の温泉資源と温泉地が育んできた歴史や文化、持ち味を活かし、まさしく〝ニッポンのオンセン〟らしさを発揮し、アピールしていく必要がある。このように日本の温泉（地）はグローバルな観光資源としてもっと評価されてよい。今回の温泉選定評価がその一助となることを期待したい。

（いしかわ　みちお）

石川理夫（いしかわ みちお）
1947年仙台市生まれ。東京大学法学部卒業。百科事典編集者を経て、企画編集会社有限会社ミュー・ワークス代表取締役。温泉評論家。環境省中央環境審議会自然環境部会温泉小委員会専門委員。2012年より日本温泉地域学会会長。

（注1）この他にも種別「動物」で選ばれた「地獄谷野猿公苑のサル」は長野県地獄谷温泉に当たる。
（注2）熊野本宮詣での人々が参詣前に湯の峰温泉で心身を洗い清めた。
（注3）火山性温泉が多いイタリアやニュージーランド等にも地獄景観がある。
（注4）米国の女性政治学者エリノア・オストロムがこの研究で2009年のノーベル経済学賞を受賞した。
（注5）于航（城西国際大学）「中国の温泉文化について」『温泉地域研究』第6号より。